

■明石覚一(検校) 盲目の琵琶演奏家。室町時代に平曲を盛んにし、視覚障害者を救済する検校制度を創設した福祉事業の先駆者。

あかしかくいち

一山一寧来日1299=

いわゆる両統迭立の時代、持明院統の後伏見天皇の頃、北関東の下野の国の百姓に生まれたらしい。

幼くして失明、おそらく才能が知られて、上洛し、如一到弟子入り、琵琶法師になる。

將軍追放入替1308=9歳:

この頃の琵琶法師は、如一のように名前に“一”の字をもつ集団と、城玄のように“城”の字をもつ集団に分かれており、前者の名乗りは平安京に設けられた“東市”に由来するものと想定されている。南北朝末期に書かれた「庭訓往来」には、市に招く者としてさまざまな芸能者が挙げられており、そのなかに琵琶法師も含まれている。

..... 1315=16歳: この年描かれた「大覚寺絵図」に見るように、寺域には市が開かれる“市庭”があったが、両統迭立のもう一統大覚寺には、琵琶法師が足繁く出入りしたことは間違いないだろう。“市庭”の守護神の多くは胸に琵琶を抱く弁財天で、琵琶法師の守護神でもあった。大覚寺に「覚一本平語相伝次第」なる文書が伝わり、殺害された盲人の供養のための十王堂が寄進されたという伝説が生まれたのも、当然であったといえる。

文保御和談・1317=18歳:

後醍醐天皇・1318=19歳:

後醍醐親政始1321=22歳:

琵琶法師が足繁く出入りした大覚寺統の後醍醐天皇が即位し、

親政とともに、討幕活動を開始、

幕府と朝廷の抗争が続く間、師匠如一の口伝の物語を記録し考証するとともに、

北条分家執権1326=27歳:

天賦の芸才にますます磨きをかけて、琵琶の腕も相当のものになって、おそらく天皇まで知られるほどになるが、大道河原乞食の芸人であることは変わりなく、何とかそこから脱しようとするうち、

元弘の変・・・1331=32歳: 前幕府執権北条高時から畿内出陣を命じられた足利尊氏は、一方の大將として参戦したものの、父貞氏の死去にあったばかりで、まだ仏事も済ませていなかったため、深い憤りを覚え、心中北条氏打倒を決意、

鎌倉幕府滅亡1333=34歳:

後醍醐天皇の諸国への挙兵呼びかけに応じた足利尊氏の参戦で、鎌倉幕府が滅亡すると、政治的才覚を発揮、出身地が同じだったことを根拠に、現在流通している足利尊氏の従弟に生まれ、鎌倉時代には明石を領して、中年まで播磨国書写山の僧であったが、急に失明し、一方流の流祖如一到弟子入り、琵琶法師となつたとする身分を作る一方、

二条河原落書1334=35歳:

当道式目に、'人王九十五代後醍醐天皇の御宇に当道皆座の座上を以て職役と名づく。明石検校覚一其の座上によりて職を号して官位の事を執行(とりおこな)ふ'とあるので、盲人、琵琶師の地位を向上すべく(当道座)を組織する構想を固め、

中先代の乱・1335=36歳:

南北朝分裂・1336=37歳:

北条高時の遺子時行が関東で乱を起こしたのを利用して、新政府への反逆の態度を明らかにした、\*足利尊氏が將軍につくや、その力を背景に、自らの屋敷を本所として、琵琶の全国団体ともいふべき(当道座)を組織し、その初代の惣検校になって、明石検校とも呼ばれるようになる。もともと琵琶は雅楽を正統としており、正当な表芸という意味の“当道”を用いて、裏芸とされていた平曲をも表芸にしたのである。

後醍醐天皇没1339=40歳:

..... 1344=45歳:

後醍醐天皇が死去、  
天皇家は、南北二朝に別れ、戦乱が絶えなかったが、「太平記」には、この間、病床の高師直のところに、  
他の道々の能者と共に招かれ、平家を弾奏したところ、師直が、枕を押しつけ耳を澄まして聴きほれ、同座のものも感嘆の声を上げて感じいったとある。

観応の擾乱始1350=51歳:

観応の擾乱終1352=53歳:

..... 1353=54歳:

足利政権の基盤が確立して以降は、  
自らが、天皇・上皇・親王らのための御前演奏を行うことも多くなり、貴族や武士の間に平曲を弾じて、その至芸ともいふべき演奏は高い評価を受けただけでなく、上流社会の武人や政治家とも付き合いながら、(当道座)の勢力を伸ばしていき、大道河原乞食の芸人だった琵琶法師たちからも、貴紳の邸宅まで呼ばれる者が出てくる迄になる。

足利尊氏没・1358=59歳:

尊氏が死去。歴史的なタイミングから見れば、後醍醐天皇と足利尊氏の登場で、軍事的な鎌倉幕府から、文化的な室町幕府へ転換することを象徴する出来事の一つであったといえよう。

..... 1362=63歳:

山名時氏征討1363=64歳:

勸進平家を演じた記録が、中原師守の日記「師守記」のこの年の条に見える。

足利義満將軍1368=69歳:

師如一の口伝を記録しただけでなく、「平家物語」のうち「灌頂巻」を独立させて神聖視する、世にいう「覚一本」を遺したことで、平曲をさかんにし、当道座の維持・結束も図られるなど、一方流中興の祖とも呼ばれ、城玄の流れをくむ八坂流は衰退していく。按摩・鍼灸の達人でもあったと伝えられているが、

..... 1371=72歳:

没した。  
15世紀の半ばからは、一方、八坂の両流から妙観派、大山派、その他六派に別れ、平家琵琶は隆盛を極め、応仁の乱の少し前には、京都で六百名近くいたことが記されているが、乱の発生で、京都が焼け野原になると、平家琵琶は衰微、戦国の世を経て天下統一がなされ、江戸時代になるや、琵琶は三味線にとって替わられ、浄瑠璃の発生によって平曲が廃れていくと、芸能組織としての機能よりも経済的な自助組織の色彩が強くなり、職階は大きく分けて、検校、別当、勾頭、座頭の四官で、これをさらに十六階七十三刻に階級化していく。(当道座)は、やがて、琵琶法師に限らず、幕府が公認する男性盲人の自治的職能互助組織となって、明治の当道廃止に到るまで当道600年もの間繁栄していくことになるが、盲人の地位向上や生業の安定をはかるばかりでなく、生業に関して師匠から弟子へ技能を継承する教育機関としての役割も担い、江戸時代になると幕府によって公認されて寺社奉行の管轄下になる、まさに盲人福祉行政そのものになった。